Fate/CHRONICLE

烏妣 揺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆａｔｅ／ＣＨＲＯＮＩＣＬＥ

【Ｎコード】
Ｎ６３９２Ｙ

【作者名】
烏妣　揺

【あらすじ】
この作品は、Ｆａｔｅの二次創作なのに聖杯戦争を行いません。冬木市が舞台でもないし、衛宮士郎や遠坂凛も出てくる予定はありません。
かといって、完全にギャグに走ったモノでもございません。
これは、サーヴァント達にスポットライトを当ててみた物語です。
自称・普通の主人公が、ひょんなことから聖杯戦争で活躍したサーヴァント達の生前の世界をめぐる旅に出るって話です。
各世界で、魔物と戦ったり、英雄と戦ったり、過去のトラウマと戦

ったりします。

ある意味前代未モンの物語ですが、どうぞよろしくお願いします！

Ａｃｔ．１　これが日常でした。

７月１１日（月）
夏休みまで後一週間という今日。

オレは、真っ白い部屋で目覚めた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・ん？」

知らない天井だ・・・。

あれ？　何故にオレはこんなとこで寝ているんだ？

何故か頭が痛いし・・・？

少々記憶が抜け落ちている・・・。

・・・・・・・・・・・まさか、記憶喪失！？

ココハドコ？
ワタシハダレ？

「ここは高校の保健室で、あなたの名前は最東海斗（サイトウ カイト）でしょうが・・・」

ちょっとしたギャグにマジレスが返ってきた。

・・・・・・そうか、ここはやっぱり保健室か。
今まで一回も来たことなかったし、知らないはずだ。

「あ、静間(シズマ)さん？　何故にここに？」

ガバリとベットから背を起こすとそこには、我がクラスの誇るク～ルビュ～ティ～・静間夏憐(シズマカレン)さんがいた。

「それは私が保健委員だからに決まってるでしょ」

「・・・・・・でさ、ちなみに少々お伺いいたしますが、オレは何故にここでぐっすり寝ちゃったりしてんの？」

すると、静間さんは絶対零度の視線を向けた。

ちょ、怖いって！

「・・・・・・あなた、ほ・ん・と・うに覚えてないの？」

「うん？」

スッカリ、サッパリ、何もかも、丸っきり覚えてません。

「ヒントその一。ソフトボール」

静間さんは、指を一本たてて言う。

「ヒントその二。サッカーボール」

今度は二本立てた。

「・・・・・・まだわからないの？　ヒントその三。ホームラン」

今度はイライラしながら三本目を立てる。

あ、

「嗚呼、思い出した！」

「ふぅ、やっと思い出したのね」

「今日ジャンプの発売日じゃん！」

「シバき倒すわよ！？」

静間さんマジギレ。

何気に当然の結果だったり？

「ヒントその四。ＰＫ！！」

『ＰＫ』

・ネトゲ用語、プレイヤーキルの略称

・サッカーのルール

・パシフィック・ケンジのイニシャル

-Ｗｉｋｉｐｅｄｉａモバイル参照（嘘）

・・・・・・この場合は二番目の意味だろうな。

パシフィック・ケンジなんて名前から人種国籍が判別出来ない不審人物なんて知らないし、この場でＰ（オレ）ｌａｙｅｒをキル（殺す）され

ては堪らないしな。

となると・・・。

「あ、思い出した。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「いや、マジだって！　ほら、あれだろ？　体育の時のやつ」

今日の体育。
男子はグラウンドでサッカー。
女子は隣接する野球場でソフトボールをしていた。

でだ、チームのエース（自称）たるオレが、ＰＫで華麗なシュートを決めようと足を振り上げたその瞬間、ソフトボールの方でドコゾの誰かがホームランを打ち、その記念すべきホームランボールが後頭部へ直撃！
そのせいでボールを蹴る力加減やらコントロール何かを誤ったまま全力シュ～ト！！
そんな状態で放ったボールが、ゴールネットを揺らすことなどあるはずもなく・・・。
結果、ゴールの枠に当たりバウンド。
それをオレは顔面で受け止め昏倒。
それで今に至る。・・・と思う。

「そうよ。やっと思い出したのね。あの時、見てて笑っちゃったわよ」

クスッ、と静間さんが微笑む。

・・・・・・・・・ヤバイ、スゲー可愛い。

「まぁ、その後いくらたっても目覚めないから、凄く心配したのよ？」

「ん？　そうなの？」

「えぇ、後３０分たっても目を覚まさなかったら救急車を呼ぶ予定だったから」

「そんなに！？」

そこまでヤバかったのか・・・

「ちなみにあなたは一時間以上眠っていたの。だからもう放課後よ」

体育があったのは５時間目。

６時間目の間中ずっと眠ってたんだな。

・・・・・・ラッキー♪　オレ英文苦手だからサボれてよかった～。

「・・・・・・もしかして静間さん、ずっと付き添ってくれてたりしてた？」

「・・・ッ！！」

急にプイッと顔を反らす静間さん。

「べ、べべべべつ、別にそ、そんな訳ナイ、じゃなイ！」

噛んでるし、吃(ドモ)ったし、声裏返ってるし、・・・・・・あと、後ろを向いてて分かりにくいけど、耳の後ろまで真っ赤だし。

・・・・・・・照れてますね静間さん。

可ッ愛い～☆

静間さんは、クーデレかと思ったらツンデレだったのかよ！

「あれ、もしかしてオレ、モテ期到来？」

苦渋の１５年の非モテ期がようやく終了したか！！

「か、勘違いしないでよ！　バカ？　バカなのあなたは？」

ツンデレの代名詞戴きました！

「え？　でもでも静間さんずっとオレに付き添ってたんですよね？
英語の授業サボってまで？　放課後もつかず離れず？」

「う、うるさい！！」

静間さん、爆発！

「ぐはッ！」

とうとう羞恥が臨界突破し、真っ赤な顔から火を噴きながら、渾身の左ストレートがオレの肝臓（レバー）を貫いた。

▼静間　夏憐▲

ふぅ、と一つ息をつく。

彼が保健室を出て行ったから、やっと緊張から解放された。

「・・・・・・今日は、少しお話が出来た、わね」

『最東くんと話が出来た。』

ただそれだけで、嬉しさが溢れ出しそうになる。

ここしばらくの間は、今日のやり取りを毎晩思い出して、ベットの中で悶絶する自信があるわ。

「はぁ、まだ顔が熱いわね・・・」

正直に告白すると、私は最東海斗くんが好きだ。

そりゃあもうベタ惚れよ。

だから、
彼の前に立つと緊張してしまってガチガチになってしまう。
・・・・・・・だから本当はもっと優しく接したいのに、どうしてもあんな冷たい、つっけんどんな態度をとってしまう。
そのことが原因で、最近、彼やクラスメイトから『一年B組のクールビューティー』なんて呼ばれ始めてしまった。

「・・・・・・はぁ～」

私がまた一つ溜息をついたその時。
ガラガラと言う音を立てて建て付けの悪い保健室の扉が開いた。

「あれ？　もしかして最東の奴、もう帰ったのか？」

保健室に入ってきたのは、クラスメイトの天野夢色（アマノユメイロ）君。
女子の様な名前だけど、長身で細身ながらやや筋肉質な身体つき、どことなく鋭角な印象があるれっきとした男子生徒である。

「どうかしたの？」

「いや、ちょっと様子を見に来ただけだ」

ちなみに、彼は最東くんの中学からの親友だ。

彼は最東くんを見舞いにきた様だった。

「生憎、最東くんはさっき目覚めてとっとと帰ってしまったわよ？」

「あ、マジ？　じゃあ入れ違いになっちまったか」

そう言った後、ふと何かに気が付いたみたいに私の顔をジロジロ見回し、天野君はこう言ったのだ。

「・・・お前さ、あいつのこと好きだろ？」

「・・・・・・・・・・・ッ！！！！」

なッ、何で！

なんでわかったのよ！！

余りにも驚いて、動揺して、何も喋れずに口をパクパク動かす私に、彼はふとこう漏らすのだった。

「へ～。ちょっと無謀かも知れねぇが、頑張れよ。応援すんぜ？」

その言い方に、カチンと来た。

「・・・・・・何が無謀なのよ？」

すると彼は間髪入れずにこう答えた。

「だってさ、あいつはもうお姫様（プリンセス）の騎士（ナイト）様だし？」

▼最東　海斗▲

コンコン、病室のドアをノックする。

中からの返事はない。・・・・・・・まぁ、当然なのだけれど。

「ソラ、入るよ？」

そう言ってドアを開ける。

まず目に飛び込むのは、白を基調にした綺麗な部屋。
その部屋の窓際に置かれたベットの上に、彼女はいた。

立てば腰まで届くであろう長い髪を窓から吹く夏風になびかせた、
蝋（ロウ）の様に白い肌の少女・・・。

この１５３２号病室の住人であり、幼なじみの真宮（マミヤ）ソラだ。

ソラは、入ってきたオレの姿を見付けると、向日葵の様な笑顔を見せて『こんにちは』と、唇を動かす。

・・・・・・そう”動かす”だけだ。

ソラは、言葉を話すことが出来ない。

「元気だった？」

すると彼女は、ベットのサイドテーブルにおいてあったケータイを取り、ボタンを押して文章を打ち込み、オレに見せる。

『全然元気！寧ろ元気過ぎて凄く退屈だった（－３－）』

「い～じゃん、退屈でも」

何事かがあるより全然良いよ。

『それとさ、カイトにこの前借りてきて貰った本、全部読んじゃった』

ふと見ると、彼女がケータイを取ったサイドテーブルに、数冊の小説が積まれていた。

「ん？　あぁ、どうだった？」

『スッゴく面白かった！！』

ソラが読んでいたのは『尾崎亜子（オザキ アコ）』という小説家の作品だ。

尾崎亜子は、異世界を舞台としたハイ・ファンタジー作品や歴史を題材にした作品に定評のある人気作家で、オレ達の様な十代の若者から四十代の中年に到るまでの多くの人々から支持されている。

彼女の最大の魅力は、世界観の緻密さと、独特な『リアリティ』だ。

それはまさに、読者にもう一つの別世界を覗いて書いたかの様な印象を与える。

一番最初にオレがハマって、ソラに教えたら彼女も好きになった。

・・・今じゃ、オレよりのめり込んでいる。

一週間もたたずにハードカバー三冊も読み終わるんだからな。

「じゃ、また探して借りて来るよ」

『いつもありがとうね。』

「別にいいよ、この程度」

ソラの代わりに図書館で本を借りて来る程度。

このくらい、なんでもない。

負担にすらならないよ。

俺はソラに聞こえない様に呟く。

「・・・・・・だってさ、これくらいのことしか、オレには出来な

いから」

・・・・・・・そう。

オレなんかには、この程度のことしか、ソラにしてやれないのだから・・・・・・・。

▼最東海斗▲

さて、ソラの病院からの帰り道。

途中図書館で本を返却し、新しい『尾崎亜子』の小説を借りた。

・・・・・・なんというか、段々借りる本が無くなっていくな。

『尾崎亜子』自体、余り沢山の小説をだしてないから、もう無いんだよな。

今借りたのも一冊だけだし。

早く新作でも出てほしい。

そんなことをつらつらと考えながら、オレは帰り道の途中にある商店街をぶらつく。

何故かって？

それは、おつかいがあったからだ！

・・・・・・・え？

何故におつかいだって？

いやさ、うちの妹から頼まれてたんだわな。

オレん家、おふくろは海外の大学で教授をしているため帰ってこず、親父は世界放浪（またの名を行方不明、もしくは失踪ともいう）中で、阿呆な馬鹿妹とオレのほぼ二人暮らし。

大抵の家事は二人とも出来るから、食事当番なんか日替わりでやってる。

で、今日の当番は妹なのだが、今朝おつかいを頼まれたんだ。

妹の中学校は商店街から遠いし、俺なら病院からの帰り道で通るからな。

それで現在おつかい遂行中なのだが・・・

「いやさ・・・・・・買うもの多過ぎね？」

メモの長さ約２０？。

買うもの、約３０品目。

「えっと・・・・・・カレールゥ、人参、ジャガ芋は買ったな」

あと買うものは・・・

「あんこ、みょうが、山葵、チンゲンサイ、鯖??」

あれ?

脈絡が見えない・・・。

「・・・・・・納豆(ひきわり)、鷹の爪、タケノコ、カズノコ、ツチノコ、生姜、ニンニク・・・・・・あ!」

なんか一つ商店街じゃ入手出来ないものがあったが、気にしちゃダメだと思う。

そんなことはともかく、不意に吹いた(駄洒落じゃない)一陣の風が、メモを吹き飛ばした。

「げ、まだ全項目に目を通してねぇよ!」

んなこと言ってる間にメモはどんどん吹き飛ばされ、遠ざかる!

「おいこら、まちやがれ〜!!」

風、強ッ!

全然追いつけねぇ!!

高校生にもなって街中で全力疾走だとか!

マジでありえねぇ！

強風に煽られ、メモはどんどん遠ざかり、気づけば、商店街を通り過ぎ、住宅街へ突入。

そしてメモは一軒の家の敷地へ・・・。

あ、いや訂正。

「・・・・・・”家”っていうより”屋敷”だな。」

というか、洋館。

何故にか、洋館。

住宅街のド真ん中に、森みたいな庭のある、デカい洋館。

ちょっと、どんたけ～。

「・・・・・・・・・・古いな。」

オレのギャグも、この洋館も。

さて、ど～したもんかねぇ・・・。

鉄柵の隙間から入っていっちゃったメモ。

隙間から手を入れようにも、間隔が狭くて腕をいれることが出来ない。

普通こういう場合なら、チャイムを押して住んでいる人に一言断って取りに行くのがセオリーなんだろうけど。

それが模範解答なんだろうけど！

しかし、残念ながらオレはそんな模範的人間じゃないからさ、某国民的アニメのカ〇オくんの様に鉄柵をよじ登って不法侵入する方法をとるぜ！

メモ取るだけにいちいち許可取るのも面倒だし。

「・・・・・・よっと」

少しジャンプして鉄柵の上部を掴み、飛び乗る。

夏の日差しに熱せられた鉄柵はかなり熱かった。

四肢を上手く使ってよじ登り、鉄柵のてっぺんまで着いた。

「危ねぇよな、これ」

西洋風な鉄柵には、てっぺんに泥棒避けの槍の穂先みたいなのが付いている。

昔、テレビ番組でこれに刺さった人がいたりしたな・・・。

帰りもよじ登るはずだし、次も気をつけるか。

トンッと音を立てて上手に着地。

目の前にあるメモを掴み、サクッと回収完了！

ミッションコンプリート♪

「よし、後はまた登・・・・・」

どくん

・・・・・・・え？

どくん
どくんどくん
どくんどくんどくん
どくんどくんどくんどくん
どくんどくんどくんどくんどくんどくんどくんどくんどくんどくん
どくんどくんどくんどくんどくんどくんどくんどくんどくんどくん

どくんどくんどくんどくんどくんどくんどくんどくんどくんどくんどくんどくんどどどドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドッ！！！！！

「ッッ！・・・・・・・・ッカ、ァァ、く、ガハッ・・・・・・・・・・・・・・・・ッ！！」

動悸が激しい。

息が出来ない。

頭痛が酷い。

頭が割れる。

意識が白く漂白される。

目の前が激しく点滅する。

駄目だ。

立っていられない。

ドサリとオレが倒れる音が、まるで他人事の様に聞こえる。

視界がぐるりと回り、地面が真直に見える。

身体が熱い。

意識を保てない。

なんだこれ。

なんだよ。

なんだよこれは！！

まさか、オレは死ぬのか？

こんなところで？

訳もわからずに？

ふざけんじゃねぇ！！

だけど、そんな意思なんてお構い無しに意識はどんどん薄れていく。

完全に意識が堕ちる寸前、一匹の黒猫がオレの目の前に現れた。

その猫の鋼色の瞳が、オレを値踏みするかの様に見ていた・・・。

▼最東海斗▲

「・・・・・・・・・・・・・・・ん？」

あれ、生きてる？

というか、

「・・・・・・何処だよ、ここ」

目覚めると、そこは庭じゃなかった。

それ以前に屋外ですらなかった。

ここは、どこかの家の一室。

で、オレはいい感じなアンティークに囲まれたその部屋のソファーに寝ていた。

ここはどこだ？

「・・・・・・ってまぁ、想像するに難しくないけどな」

ってまぁ、たぶんここはあの洋館の中だろうな。

十中八九、倒れていたオレを家主が見つけて運んできたんだな。

「あ、いや、けどちょっとまてよ・・・」

あれ？

そう考えると少しおかしいぞ。

何故、自宅の庭で倒れていた不審者（オレ）をわざわざ自宅にいれる？

人がぶっ倒れてたら、救急車または警察を呼ぶものではなかろうか？

いかにオレが学生服を着ていて高校生にしか見えなくても無用心すぎないか？

警察や救急車を呼ばない理由があるのか？

じゃあそれは・・・・・・・・もしかしてヤバいこと？

例えば、このうちの中に麻薬とかを隠していて調べられると困るから・・・とか？

「・・・・・あ、あはははははまっさかな〜！」

あはははは、は、は、はは、、、・・・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

・・・・・・まさかだよな？

「おい、ヤバいんじゃないか？」

そう考えると、途端に冷や汗が吹き出してくる。

何故にか知らないが、さっきの発作的なものの性で死にそうになったと思ったら、今度は『ヤ』のつく自由業の人達と未知との遭遇なんて冗談じゃねぇよ・・・。

右手の甲で額の汗をグッと拭う。

そこで新たなことに気付いた。

・・・・・・・・・・・右手の甲に、謎の刺青。

真っ黒な直径3?程の円形の刺青。

「・・・・・・・・・・ホント、冗談じゃねぇよな」

「えぇ、ホントに冗談じゃないわよね?」

「!?」

自分の独り言にまさかの返答が返ってきた!

慌てて声のした方を振り向くと、

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・?」

『ちょっと綺麗な近所のお姉さん』的風貌の女性が立っていた。

あれ？
ヤクザじゃないの？

「失礼ね、こんな綺麗なヤクザがどこにいるのよ？」

うわっ、心を読まれた！
うわっ、自分で自分のこと綺麗っていった！

「あの・・・・・・・貴方は？」

「私の名前？　偽名でいいなら喋るけど？」

「あ、じゃあけっこうです。」

・・・・・・・本名が喋れないっていうことは、やっぱなんかヤバ気なＷＯＲＬＤに首突っ込んでる人なのか・・・！

「ん～、確かにどっちかというとヤバ気な世界の住人ではあるけどね」

「やっぱり！」

なら、オレは一体どうなるんだ？

東京湾に沈められる？

それとも山に生き埋め？

まさか綿流し編の如くの拷問死？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「いやだぁぁぁぁ～～～～ッ！！！！」

「ちょ、何いきなり叫んでるのよ！　ビックリするじゃない！」

「これが落ち着いてられるか！　オ、オレを殺そったってそうはいかねぇぞ！！」

「な～に壮大な勘違いしてんのよ！！　むしろ私は命の恩人よ？」

「・・・・・・・・・・え？」

・・・・・・イマナニヲオッシャリマシタカ？

「だから、今現在進行形で貴方は死にかけてんの！更に私がいなかったら今貴方はとっくにオダブツ」

「何故に！？」

「右手の痣見てみ？」

そう言われてもう一度右手に出来た丸い痣（刺墨だと思ってた）を見る。

じ〜っと見つめ続けると、

うにうにうじうじ・・・・・・

「ぎゃあああ！！　動いてるぅぅぅぅう！？」

まるでアメーバの如く動いていがった。

き、気持ち悪っ（＝＿＝？

「なんだよこれ？！？！」

オレ、最早半狂乱☆

訳わかんねぇ事ばっかでお脳のキャパシティガッツリオーバー！

「ん、あぁそれ呪い」

「呪い！？」

「うん。あと一時間半で君はプッチン、この世とオサラバ！」

「人の生き死にをプリンみたいに表現すんな！！！！」

【TO BE CONTINUED】

Ａｃｔ．２　いきなり旅立ち。

▼最東海斗▲

「プリンみたいな表現はともかくとしてさ。君、呪いでマジで死ぬわよ？」

「ちょいまち。いやいや、この際プリンは実にど～でもいいんですけど、『呪い』ってなんですか？」

「そりゃ『この怨み晴らさでおくべきか～』的なホラーで命を脅かす感じの」

「よくホラー映画とか漫画とかにある？」

「そうそう、あんなイメージで合ってる合ってる♪」

「あ、そうッスか～」

へ～、呪いってあったんだな～。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

じゃなくて！！

「何故に呪い！？」

「それは私が魔法使いだから」

「魔法使ぃ?！　ちょっと、オレはいつからFantasyでMagicalなworldにDivingしちゃったんだよドチクショウ！！?！」

『呪ぃ』だとか『魔法使ぃ』だとか実際、信じられねぇけどさ。

…………痣、めっちゃ動いてんだよな〜。

単細胞生物的にウネウネと。

段々と手の甲から肘にむかってウネウネ移動してる。

で、今は手首を通過中。

きゃああああ〜ッ！

……………………。

とかいう悲鳴上げるのは、なんというか情けない様な気がした為、自重。

まぁ、婦女子でもあるまいし「気持ち悪い」って悲鳴を上げるのは、やっぱ男としてどうなのさ?

………ちなみに前話の件は、追求しないで欲しいな。

割と切実に。

「要するに、これは魔法による呪いなのか?」

「うん。正確には、『魔法』じゃなくて『魔術』だけど」

よし、成る程。

何も理解なんざ出来ちゃいないけど、ここは取り合えず魔法以外でこのアメーバ的痣を説明出来ないから、取り合え納得しよう。

「じゃ、解いてくれ」

「あ、それは無理」

「そっかぁ～、無理かぁ～、じゃ仕方ないか。残念だけど諦めるしかないなぁ～～・・・・・・ッて何故に！？」

こんな切羽詰まった状況でもノリツッコミが出来る自分にビックリ！

意外にもかなり冷静な人格をしているのかもしれない。

もしくは、ユーモアセンスがいいのか。

・・・・・・・・・・・いや、多分オレの性格がかなりおちゃらけてるだけだな。

「何故に無理なんだよ！！」

「だってそれ私が設置した呪いじゃないもん」

「はぁ！？」

「いや～、昔私の姉が嫌がらせの一種で勝手に設置しちゃって♪
何と言うか、あの性格みたいなめんどくさくて複雑で悪趣味な呪いで私も解き方わかんないのよ。あははは♪」

「笑い事じゃねぇ！」

こちらとしては、かなり切実なんですが！！

「でも運がいいね。普通なら三分で死んでるはずなのに。・・・・・・大丈夫、この進行ペースだとあと一時間半はイケる」

「それってやっぱあと一時間半で死ぬってことじゃん！！」

「だけど心配無用！　私の手に掛かればこんな性格の悪さが滲み出た様な呪い、絶対に解くことが出来る！」

「た、頼もしい！」

突如差し込む希望の光。
今まで散々不安を煽っておいて突然希望をみせて手を差し延べる。
・・・・・・・うん。典型的な詐欺商法だった。

「まず、ロックを上手く外して、術式を観察して、それを元に魔導書で調べて、それを参考に一から解除術式を組み立てる。・・・・・・・・・・・・うん、一ヶ月あれば大丈夫♪」

「ふざけんなぁぁぁぁぁ！！」

あぁ、ごめんみんな。

オレ死ぬみたいだ。

母さん、オレがいなくなっても研究がんばって。

父さん、今世界の何処にいるかもわかんないけど、たまには家に帰ってきてよね？

妹よ、お前は最期までウゼェくらいムカつく反りの合わない奴だったな。

天野、お前は理解あるいい親友だった。

静間さん、最期に見せてくれた〝デレ〟最高でしたッ（血涙）

そしてソラ、約束　守れなくてゴメン。・・・・・・本当に、ごめんなさい。

「でも、解決策がない訳でも無いけど？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

・・・・・・・・・・・・・・ジト目。

「いや本当に本当の解決策」

「マジで！！」

今まで目一杯不安を煽っておいて唐突に希望をみせて手を差し延べ

る。

・・・・・・・うん。またしても典型的な詐欺商法だった。

「その呪いって、痣という形で呪いの進行具合がわかるタイプなんだよね。そういうのってこの時空間に固定された人間を元にジリジリしわじわ侵食するタイプだと思うのよ。・・・・・・と、いうことは一つだけ解決の可能性はあるわ」

「・・・・・・そ、それは一体？」

「違う時間座標に行けばいいのよ」

・・・・・・・・・・・・は？

「は？」

じ、時間座標？？

なんだそのＳＦ小説にしか出て来ない様なＫｅｙＷｏｒｄは？

「・・・・・・すいません、もう少しかみ砕いて説明してくれませんか？」

「だから、元となっている時空間そのものを変更すれば、その呪いは良くて無効化、悪くても鎮静化するってこと」

「要するに、オレにいったい何させるんですか？」

「まぁ、早い話が・・・・・・」

「早い話が？」

「Ｙｏｕ、タイムスリップしちゃいなｙｏ♪」

「何故に！？」

「だから理由は説明したじゃん？」

「いや、だからその理由暴論すぎません！？」

呪いを解くためにｔａｉｍｕｓｕｒｉｐｐｕとか、それって『ゴキブリを退治するために、出た家ごと核で吹き飛ばします』ってレベルの暴論じゃないか？

「というか、そもそもｔａｉｍｕｓｕｒｉｐｐｕなんて出来るわけが・・・」

「私、魔法使い☆」

「・・・・・・そっか、現実とか常識とか秩序とかまとめてブッ飛ばすとびきりのＩｒｒｅｇｕｌａｒがここにいたんだっけ」

もう、時を超えるのは少女や、『禁則事項』な先輩をもつ変なあだ名の某主人公だけで充分なのに。

「何故にオレがそんな主人公属性を持たにゃならん・・・」

「そりゃ、主人公だし」

「そこ！　メタ発言禁止！！」

閑話休題。

「とにかく、本当にいかにゃならんのか・・・・・」

「死にたければどうぞ御自由に」

「行きます。行かせてください。お願いします」

魔女に向かって平伏すオレ。

「よし、じゃあさっそく・・・・」

「いきなりだな！？」

心の準備とかさせろよ！

「そもそも、そんなことして大丈夫なのか？　タイムパラドックス起こったら洒落にならないんじゃ？」

「ん、君がいない時代に落とせば大丈夫」

「じゃあ、歴史改竄は？」

「歴史は変わんないわ」

魔女は、どこか冷めた口調でキッパリと断言した。

「起こることは避けられないわ。絶対に運命は変えられない」

嫌に冷え切った、絶対的なコトバ。

もしかしたら、この不可能なことなど何もなさそうな魔女も、昔失敗したのかもしれない。

・・・・・・歴史の改竄に。

どうしても変えたい過去が、運命があったのかも。

「・・・・・・じゃ、はい」

「ん？」

魔女は、部屋の隅に置いてあるアンティークな机の影から長くて黒くてそこそこ重量のあるナニカをオレに向かって投げた。

それを若干よろけつつもキャッチ。

それは一体何かというと・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・さ、散弾銃・・・・・・・ッ！？」

実物なんて見たことも触ったこともないけど、この重さと質感は、間違いなく本物だとわかる。

「な、なんだよこれ！！？」

「護身用に決まってるでしょ？　ほら、旅先で死んじゃったら元も子も無いし」

「あんたはどんな時代にオレを行かす気だコラ！！！！」

散弾銃が必要な時代ってどこだよ！！

戦国時代か？　百年戦争時代か？　紀元前で原始人がマンモス追い掛けてる時代か？　もしくは太平洋戦争時代の満州？

・・・・・・・・・生きて帰れるか！！

「あなたなら大丈夫！」

「過度な期待をありがとう！」

そもそも、ただの時間稼ぎなら三十年前の山口県とか適当なところに落とせばいいだけじゃ？

「いや、それはダメ。」

「え？　何故に？」

どうしてダメなんだよ？

・・・・・・いや、むしろ思い通りの時代に落とすことが出来ないとか？

「だって私にメリット無いじゃん？」

「図々しいにもほどがある！？」

自分が悪いんだからこの際デメリットには目を潰れよ！

「だって、もとは不法侵入犯の君が原因じゃなくて？」

「うぐッ」

「だから、責任は半々でしょ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・むぅ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・なんか、納得いかない気がする。

「というわけで、私の取材に一役買ってもらうわよ？」

「取材？」

「そう。私、副業で小説家をしてるの。『尾崎亜子』ってペンネームで」

「へ〜、小説家ね〜・・・・・・・・・ってちょいまち！」

・・・・・・『尾崎亜子』？

『尾崎亜子』っていえば・・・？

「・・・・・嘘」

「本当よ？」

「・・・はぁ、」

「え、いや、な、なにそんなに落ち込んでるの？」

・・・・・・ごめんな、蒼空。

オレ、どうやら見ちゃいけないモノを見たみたいだ。

お前があんなに憧れている『尾崎亜子』の正体が、こんな得体のしれないトンデモ魔女だったなんて・・・・・・。

「・・・・・・生まれてきて、ごめんなさい」

「ど、どこまでショックだったのよ！！！！！」

▼最東海斗▲

「・・・・・・・とりあえず、落ち着きました」

「落ち着いてくれてありがとう。ファンだったのは嬉しいけど、何気に酷く傷ついたわ・・・」

あぁ、オレとしたことが。
あんなことで戦意喪失（？）するなんて。

いや、でもさ・・・・・・心の傷も深いよ？

「話を戻すけどさ、”取材”って何すればいいの？」

「大丈夫、すごく簡単なことだから」

そっか、それなら安心・・・

「適当な時代に行って、適当な事件か適当な戦争に巻き込まれてくれれば上出来♪」

・・・じゃねぇなオイ！

「オレ簡単に死んじゃうよ！！」

「大丈夫！ギャグ補正なら」

「いや、無いからギャグ補正！？」

ギャグ補正なんかあったら、多分世界の死亡者数は半分以上減少するだろうよ！

「ちなみに、貴方達の活躍はこの手帳に自動で書き込まれていくから」

魔女がそういって一冊の手帳を差し出す。

皮で出来た装丁の古びた手帳だ。

中を見てみた。

「・・・・・・おい、なんじゃこりゃ」

『・・・・・おい、なんじゃこりゃ』

今、言ったオレの台詞が喋ったのと同じ感じで書かさっていく。

事情を知らない人が見たらポルターガイストに見えんじゃね？

「貴方達はそれを持って旅をするの。で、旅が終わったらそれを私が回収。それを元にして新作を書くわ」

そういや『尾崎亜子』って歴史モノとかを書かせたらリアリティとかが凄いんだっけ？

・・・・・・・成る程、別な時代を覗いて書いてたなら納得出来るな。

・・・・・・・ん？

いや、まて。さっきから何か引っ掛かる・・・。

あ、

「なぁ、貴方”達”ってなんだよ？」

そう、魔女は言った。

貴方達と。

なら、それはオレの他にもうひとりいるということなのか？

「そう、貴方は一人でいく訳じゃないわ。そこにいる”彼”と一緒よ」

オレは、魔女の指差す方を向く。

そこにいたのは、

「・・・・・・あ、あの時の猫」

オレが呪いで倒れた時に見た、鋼色の瞳をもつ黒猫だった。

魔女×黒猫＝の公式で出て来るのはただひとつ。

「・・・・・・使い魔ってやつか？」

「ピンポ～ン♪」

どうやら正解したようだ。

・・・・・・取りあえず喜べばいいのかな？

「イェイ！やったぜ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あっそ。」

「うわ、なんだこのシラけた反応！？」

随分温度差あるなこの野郎！

「いや、たかがそれくらいで何喜んでるんだろうな～って思って」

「意外とシビアな答キタ！！」

・・・・・・・・・予想外です。

「この使い魔には、時間移動に使う術式を組み込んであるから」

「要するに、生きたタイムマシーンってことか？」

「そう、まさしくそんな感じ。ちなみに一度に三人まで移動可能ね」

「へ～、そうなんだ」

オレは、これから世話になる（？）黒猫に、「よろしく」という意図で頭を撫でようと手を伸ばす。

すると、

ジャキィ～ィン

「・・・・・・痛ッ！！」

思いっ切り引っ掻かれた！

「あ、そうそう。彼、凄くプライド高いから引っ掻かれない様に気を付けてね？」

「遅い！！」

・・・・・・どうしよう。

なんかもう既に、この猫と上手くやってく自信がなくなってきた。

「よし、じゃ術式展開♪」

「え？」

例の使い魔を中心に蒼い光がほとばしり、光が床に大きな魔法陣を描く。

「ちょ、ちょっとまて！　いきなり過ぎるだろ！？」

オレは直感で理解する。

この蒼い魔法陣こそが時代を跳躍する『魔法』なのだと。

「だって、私の使い魔ともいい感じに打ち解けたみたいだし？」

「どこが！？」

お前の目は節穴か！！

「・・・・・・それにさ、こうやって話している間も、呪いは進行して行くのよ？」

「・・・あ」

・・・・・・いつの間にか、あの痣は二の腕まで這い上がってきていた。

「・・・・・・大丈夫。君がいなくなったあとのつじつま合わせとか、細かいことは私がやっておくから」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「だから気にせず、いってらっしゃい」

そういって、魔女は薄く微笑む。

まるで、オレの心を静かに蝕む死の恐怖や未知の不安を、少しでも和らげようとしてくれているようだった。

・・・・・・・多分、彼女なりの気遣い。

だからオレは、段々と強さをます蒼い光の中、こう言うことにした。

「・・・・・・・・・行ってきます」

光の輝きが最高潮になり、周りの景色が歪む。

これが、約一ヶ月にも及ぶ長い時間旅行の始まりだった・・・。

【ＴＯ　ＢＥ　ＣＯＮＴＩＮＵＥＤ】

Ａｃｔ．３　何気に死に掛ける。

▼最東海斗▲

・・・・・・・全てが歪んでいた。

そりゃもうグチャグチャに。

右も左も前も後も上も下もわからないくらい。

更に、視覚ですらそうなんだから、感覚なんてもうやばい。

なんというか、その、胃をそのまま裏返して五臓六腑をシェイクしたかのような・・・。

まぁ、有り体に簡潔に述べるのなら・・・

「・・・・・・・気〝持〝ち〝悪〝い〝」

・・・ということだ。

気持ちの悪い景色が終わった瞬間、あまりの気持ち悪さに地面に膝をつく。

この気持ち悪さは、ある種の酷い車酔いに似ていた。

・・・・・・まぁ、似ているだけでその酷さのＬＥＶＥＬは車酔いなんざ軽く超越してしまっていたが。

「・・・・・・・・・うっプ」

吐かなかっただけで、オレはよくやったと思う。

オレじゃなかったら、誰であろうと百パーセントＲｅｖｅｒｓｅしてるな。

「・・・・・・・う、■ッげ■、■～■！」

・・・・・・・・前言撤回。

今の無しで。

▼最東海斗▲

・・・・・・・うん、さっきのは無かったことにしよう。

よし、さっそく切り替えていこう！

そう思い、周りを見渡す。

やっぱり、というか本当に世界を時間を超えたんだな。

そう思わざる負えない光景があった。

ぶっちゃけて言うと、今オレがいるのは・・・・・・

「・・・・・・・・・・ 回廊か？」

石の壁で囲まれた、長い回廊のど真ん中にいた。

回廊の幅は約三？、天井の高さは約二？くらいか？

床は黒ずんだ土。

壁には窓が一切なく、妙に静かで空気がヒンヤリしていることから、多分ここは地下にあるのだと思う。

普通、電気の無い地下なんて真っ暗で何も見えないはずなのだが、光るコケの様なものがあちこちに生えて（？）いて、回廊全体が仄かに明るい。

なんというか、一瞬でこんな変な場所につくとは。

「マジでｔａｉｍｕｓｕｒｉｐｐｕしちゃったんだな・・・。」

・・・・・・ こりゃもう、本気で信じるしかないよな。

「・・・・・・ っと、そうだ。呪い呪い」

移動したら、良くて解呪（呪いを解くだから・・・ これでいいよな？）、悪くても鎮静化するらしいが・・・・・。

とりあえず、半袖のワイシャツの袖をめくって確認。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

結論を端的に述べよう。

あった。

ありました。

痣がありやがりました！！

・・・の三段活用！

使い方あってるかどうかわかんないけどね！！

でもまぁ、鎮静化はしてる・・・んだよな？

進行スピードが明らかに遅い。

具体的には十分の一くらいだな。

いや、十分の一以下かな？

ぽっと見、止まってる様に見えるけどチビチビと地味に動いてる。

・・・・・・・ってことは、

「・・・・・・あの魔女が呪いを解く方法見つけるまで旅しなきゃならないってことか」

旅の目的ってのはアレだろ？

呪いの時間稼ぎしつつ、適当になんか歴史小説の題材になりそうなことを取材（というか体験）することだろ？

まさか、ここはＤａｎｇｅｒｏｕｓＺｏｎｅ？

とりあえず、周囲を見渡して見よう。

右見て、左見て、前見て、後ろ見て、上見て、下を見る。

「・・・・・・あ、」

オレから少し離れた場所に、オレのバックを発見。

運よく、ｔａｉｍｕｓｕｒｉｐｐｕの範囲に入ってたみたいだな。

近付いて拾い上げる。

授業に使う教科書類は学校のロッカーに置きっぱなしにしているから、やはり意外と軽い。

中に入ってるのは、今晩の夕飯となるはずだったカレーの材料だ。

「・・・・・・帰りたくねぇな」

妹に頼まれたお使いを完了せずに、今は別な時代だからな～。

絶対怒ってるよ。

癇癪起こすよ。

宥めるのめんどくせぇよ。

そんな感じて、何故にか最早帰りたくなくなってきたオレに突き刺さる視線。

その方向を見ると、例の使い魔がいた。

例の使い魔が鋼色の瞳をこちらに向けていた。

・・・・・・・というか、黒猫っていったら、普通瞳の色は金じゃないの？

何故に鋼色？

・・・・・・・いや、別に今関係ないけどさ。

それよりも今大切なのは、これからどうするかなんだよな。

周囲確認した限りでは、特別危なそうには見えない。

だけど、ずっとここに留まる訳にはいかないから、どっちかに進まなきゃいけない。

とりあえず、ここは地下っぽいから出口を目指すとして。

前か後ろ・・・・・・・そもそも、中途半端な場所に落とされたからどっち行けば出口なのかがわからない。

どうしようかな。

・・・・・・・・・・・・・・・よし、とにかく前に進もう！

ここにいるのはオレ（と猫一匹）だけで相談もなにも出来ないんだし、黙っていたって仕方ないし。

オレはバックを背負い、猫と一緒に前へ進む。

一応、出口へ向かってるつもりが、実はどんどん奥地へ進んでることなど露知らずに・・・。

▼最東海斗▲

・・・・・・1時間。

そう、1時間歩いた。

あぁ、1時間歩き続けました。

そして1時間歩き続けた感想←

「・・・・・・・・・・・・迷った！！」

オレ、迷子になっちゃいました☆

・・・・・・・いや、語尾に☆つけても全然笑えない。

というか、男が語尾に☆つけてしゃべってもキモいだけだな・・・。

今更ながら、思いしらされた！

以後、自重します。

まぁ、以後自重したところで現状は何も解決出来ないけどな！

→これ、お先真っ暗なオレの見付けた数少ない事実。

「いや、もう完全に迷った・・・」

最初は一本道だったのに途中で多岐になって、本能の赴くままに（要は勘で）道を選んで突き進んでたらいつの間にかこんなんになっちゃった。

スマホならＧＰＳ使って現在地把握出来るのに、オレの二つ折りのケータイだから無理。

くそ、あの時「いや、片手で使えないスマホは不器用なオレにはちょっと・・・・・・」とか言わずに、素直にスマホに機種変更すればよかった！！

・・・・・・・いや、何かあるはずだ。

二つ折りでもこの状況を打破する何かが・・・！

あ、そうだ通話機能を使えば！

通話機能を使って助けを呼べばいいんだ！

なんて簡単なことだったんだろう！

何故にオレはそんな単純なことに気づかなかったんだ！

よし、じゃあ天野辺りにでもＳＯＳを．．．．．．

『圏外』

．．．．．．地面に膝をついてうなだれた。

誰がって？

オレしかいないじゃん？

地下なんだから圏外なのあたりまえじゃん！

いや、それ以前に今の時代でケータイ使えるかどうかも謎だ！！

・・・・・・まずいぞ。

非常にまずい。

誰にも助けてもらえないという状況もかなりマズイが、ケータイが使えないということは、誰とも話せないということとイコールであり、それはつまり、人との会話(コミニュケーション)におもむきをおいて生活しているオレにとっては、ある意味致命的だ！！

うさぎは一人ぼっちだと寂しくて死んでしまうのと同じように、オレは会話がないと寂しくて死んでしまう（かもしれない）のだ！

「・・・・・・・・・・・・・・・。」

無いものねだりしたって仕方ない。

頑張ろうぜ？　オレ。

でも、実のところもう一時間以上も誰とも会っていないし話してもいない。

独り言だけがどんどん弾んでいく・・・・・・。

このまま独り言が癖になったらどうしよう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

とりあえず、打開案として黒猫に話しかけることにする。

生き物に話しかけるのもアレかと思うのだけれども、まぁ、独り言

をいうよりはマシだとオレは判断することにした。

「なぁ、お前はこっちの道であってると思うか？」

「・・・・・・まず、私は君がどこへ向かっているのかを知らされていない。だから何とも答えることが出来ないのだが？」

「いや、出口に向かっているに決まってるじゃん？何故に好き好んで奥へ向かってトレジャーハントしなくちゃいけないんだよ」

「む、それもそうか」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・ん？

あれ？

なんかおかしいぞ？

うん、何がおかしいかって？

それは・・・・・・・

「・・・・・・・猫がしゃべった！！？！」

なんか会話成立しちゃってた！！
何故に猫がしゃべれるんだ！？
「何故驚く？」
「いや、驚かない方がおかしいよね？」
「君は、あの魔女の作った使い魔が普通の使い魔だとでも思っていたのかね？」
「・・・・・・ぶっちゃけ、思ってなかったです」
まぁ、流石に黒猫が凛々しい男声で話すとは予想外っすけど。
「あ～、事のついでに自己紹介しますね」
「何故いきなり敬語で話す？」
いや、声色的に年上っぽいので。
「最東海斗（サイトウ カイト）、高校一年の１５歳。ちなみに彼女いない歴＝年齢です。家族構成は、（現在絶賛失踪中の）父、（海外の研究所に篭りっぱなしの）母、（来年から礼園女学院に通う予定の性格の悪い）妹の四人家族です。」
「必要最低限の情報から不必要極まりない個人情報まで聞きもしないのにベラベラとご丁寧に説明ありがとう」

・・・・・・あ、なんかムカつく。

なんだこの皮肉屋な猫は！

何故に上から目線だ！

実際はこっちの方が目線は上なのに！

「で、そっちの名前は？」

「無い」

「・・・・・・・・・は？」

「だから無いといったのだ」

え、名前が無いのか？

どんな飼い主だろうと飼い猫に名前ぐらい付けるんじゃ？

・・・・・・あ、いや、飼い猫じゃなくて使い魔だから違うのか？

「所詮、魔術師にとっての使い魔とは、名前を付ける必要すらない存在だからな」

「・・・・・いや、でも、一応これから一緒に旅するんだし、名前があった方がお互い呼びやすいよな？　なんか無い？」

「・・・・・・そうだな。なら『エミヤ』とでも名乗っておこう」

「『エミヤ』？」

「私の生前の名前だ」

生前の名前？

あれ？

使い魔って普通下級悪魔とかじゃなかったんだっけ？

ファンタジー小説で仕入れた知識が主だけどさ。

「残念ながら、私は特別製でね。私は、”座”にある英霊『エミヤ』をサーヴァント召喚の要領で分身を作りだし、黒猫の器（カラダ）に憑依させたものだ。」

「・・・・・・・・・・・・・？？」

”座”？

英霊？

サーヴァント？

訳わからん？？

「要は、私はもともと人間で英雄だったということだ」

「成る程、じゃあエミヤンは元は偉かったってことか」

「エ、エミヤン！？」

「ん？何故にそんな驚いた声をだす？」

「その『エミヤン』というのはなんだ！！」

「あだ名だけど？」

「そのあだ名は止めろ！止めてくれ！！」

うん、なんか打ち解けたかな？

閑話休題。

「・・・・・・ところでエミヤン？」

「とりあえず、その不快なニックネームを止めろ！」

「３０分くらい歩きながら話ていたけど、なんか一向に出口に着かないね？」

「そうだな。むしろ、どんどん奥へ進んでいるのかもな」

薄々そうかもとは思っていたけど、やっぱりそうかな？

「そもそもここって何なんだ？　何かの遺跡か？」

それにしては何か妙な気がする。

どこがどうとは具体的には言えないけどさ・・・。

「そうだな。私の考察を述べるのなら、ここは墓地だ」

「墓地！？」

いきなりエミヤンがとんでもない考察をぶちまけた。

「この回廊は、複数の人間が通ることを前提とした大きさになっているのにもかかわらず、篝火などの明かりを付ける設備もなければ痕跡もない」

確かに、この回廊には明かりが何一つない。

今、オレ達が無難に歩いていられるのはあちこちに自生した光る苔のおかげだ。

もともとここが新築だった頃にはこんなものは生えてる訳がないから、確かに不自然だな。

しかし・・・

「だからと言って何故に墓地？」

「この回廊自体が微力ながら魔力を秘めている。この回廊の建築技術は紀元前のものであり、更に回廊自体が魔力を帯びているのなら。この時代の地下にある魔力を帯びた建築物と言えば『神殿』か『墓

地』の二択だろう。
そして神殿なら、神聖とされる火を焚いて道を照らすはず。
その痕跡がないということなら、それは人間が内に入ることを前提としていないということだ。
ならば、それはもう墓地しかないだろう」

「じゃ、この明らかに人が通ることを前提とされているであろう広さは？」

「おそらくは、遺体の運搬の為だろう。遺体は最低でも二人組で運ぶものだからな。」

「あ～、成る程！」

「ちなみに、私達が今踏み付けて歩いている土の下にも大量の遺体が埋まっているが？」

「げげっ！！？！」

急いで飛びのく。

・・・・・・・まぁ、急いで飛びのいても一面黒土だから意味ないけど。

「生贄の一種だ。この墓地の主を死後も守護するという名目で生き埋めにされたのだろうな」

「・・・・・・日本で言うところの古墳と埴輪みたいなものか」

まぁ、こんな風習は日本だけじゃなく世界中にあったってことだよ

な。

・・・・・　２１世紀を生きる一般市民のオレの意見を言わせて貰うなら、残酷だよな。

たった一人の権力者のエゴで何十、何百人も死ななきゃならないなんてさ。

そして、オレの足がガシッと突然止まる。

「・・・・・　あとさ、もう一個聞いていいか？」

「なんだ？」

「魔力を帯びているっていったよな？　それってどゆこと？」

「所謂、自動防御プログラムの様なモノだな。　墓地の最深部にある権力者のいる場所へ近付かせない様にする為の。　だが、かなり弱っているため、余程近付かない限りは発動しないが。」

「・・・・・　それって生き埋めになった人が動いて襲ってきたりする？」

「ん？　良くわかったな？魔術の知識も無いのに」

「あ、ああああぁあし、足見てみろよぉ～」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・。」

オレの足首をガシッっと掴む黒ずんだ骸骨の手。

「まさしくそれだ」

そのエミヤンの言葉を皮切りに土の中から土筆の様に骸骨の頭が現れる！

そして首や肋骨が次々と地面から出て来る。

最早この時点でオレはかなり怖かった。

・・・・・・だから悪あがきをした。

「ぎゃぁあ！！！！」

といって掴まれて無い方の足で頭を思いっきり蹴り飛ばす！

パキンっと音がして頭が砕けた。

「脆っ！？」

ポッキー並の強度だ！？
風化して強度が落ちたのか？
「意外と弱かったなぁ」
「・・・・・・だが、量がいると厄介だぞ？」
「そうだけど・・・？」
「ほら、量が出たぞ」
「え！？」
回廊の前から後ろからワラワラと黒ずんだ骸骨が湧き出て来る。
しかも、全員、手には真っ黒に錆び付いたボロボロの剣を持って。
「・・・・・・・・・・・・ヤバくね？」
「そうだな。・・・・・・・逃げるか？」
「当たり前だ！！」
そしてオレは全力で走り出す！
逃げる方向にも骸骨兵（仮）！
だが、コイツらの強度は所詮最弱ＬＥＶＥＬだ！！

「邪魔だどぉぉけぇぇえ！！！！」

必殺のキックを骸骨兵（仮）共に喰らわせる！

ポキポキと小気味のいい音を起てて骸骨兵（仮）共が崩れていく・・・。

何故にか無双出来てる。

まぁ、確かに一体一体はザコだけどさ。

・・・・・・・・・数が多過ぎる。

ガン〇ム無双でザ〇がワラワラ出て来る感じ。

しかも出現率が二倍速！

「うげげぇ！？」

ヤバいよ！

「エミヤン！　なんか突破口とかない？」

そういって骸骨兵の隙間を縫う様に走るエミヤンに話し掛ける。

「そうだな『この魂に憐れみを（キリエ・エレイソン）』が使えればあるいは・・・」

「ナニソレ？」

「簡単に説明すると、お経を唱えて成仏させることだ」

「ちなみにオレは無信教だから、お経も聖句も言えないよ」

「私もだ」

「じゃあなんでいったんだよ！！　使える友達とかいなかったのか？　その人の真似すれば出来ない？」

どんなものかはわからないけど、やってやれないことはないかもしれない！！

「無理だな。　残念ながら私に聖職者の友人はいない。『聖職者にロクな奴はいない』とは私が生前に会得した役立つ経験論だ」

「・・・・・・いや、生前に何があったんスか？」

そんな悲痛な声色で言わないで欲しい。

こんな感じでバッキバキ言わせながらオレらは脱出しようと走り続ける・・・。

▼使い魔エミヤ▲

私達が全力で走り続けると、一つの拓けた場所へたどり着いた。

今までの回廊とは全く異なる場所だ。

今まで暗く、明かりの無かったのにこの場所はハッキリと明るい。

それは何故か？

理由は天井にある。

８？以上高い天井には大きな円（マル）い穴が空いていて、そこから零れる月明かりがこの場所を、この部屋を照らすからだ。

・・・・・・・そうだ。この場所は”部屋”だ。

しかも、大広間。

半径１０？程の円形で、一面に黒い土が敷き詰められ、その土の上に錆び付いた剣があちこちに墓標の様に刺さっている部屋。

「・・・・・・・エミヤ、一言言っていい？」

「なんだ？」

「まさかとは思うけど、ここってボスの間じゃないよね？」

「・・・・・・すまない。否定しきれない」

ここが最深部なら、もしかしたら先程までのアレ以上の”セキュリティシステム”がある可能性が・・・。

「・・・・・・しかし、これは」

どうもイメージが違う。

権力者の墓なら、もっと祭壇の様な造りになっているはずだ。更に金銀財宝とまでは行かずとも、何かしらの供物や宝が供えられていなければおかしい。

その点を考慮し、この部屋を見渡せば、成る程、確かにＲＰＧでの『ボスの間』に見えなくもない。

・・・・・・それに墓標の様に刺さっているこの大量の剣は一体？

まさか、本当に墓標では無いだろう。

この剣自体が供物なのか？

私がそう静かに考察していたとき、最東海斗は・・・・・・。

「・・・・・・・んっしょっと」

・・・・・・・・・・・・・・・その剣のひとつを引き抜こうとしていた。

「貴様、いったい何を考えている！！」

「いや、なんかヤバいのが来ても抵抗出来る様に武器を調達しようかと・・・」

「馬鹿か貴様は！」

それを引っこ抜くことでナニカが起こるかもしれないんだぞ！！

「あ、抜けた」

「・・・・・・馬鹿だな。貴様」

その馬鹿は、引き抜いた剣をもって「意外と重い・・・」といってふらふらしている。

・・・・・・もう何があっても私は知らん。

ズズズ・・・・・・

案の定、地中から何かがせりあがってくる様な音が響いてきた・・・。

▼最東海斗▲

「な、なんだなんだ！？」

適当な剣を引き抜くと、何故にか地面が揺れはじめた。

地鳴り？　地震？　それとも地割れ？

・・・・・・あ、地割れは違うか。

割れてないし。

しかし、一体全体何が起こってるんだよ？

「エミヤン？　何がどうなってるの？」

「・・・・・・私に聞くな」

何かが地面から出て来そうな感じなんだけど。

しかも、さっきまでの骸骨兵（仮）とは比べものになんない規模のやつ。

「なぁ、これって俺が剣（コレ）引き抜いたせい？」

「・・・

「ノゥわッ！？」

運よくその一撃は外れ、オレの足元に叩き付けられた。

ダイナマイトでも使ったかの様なもの凄い破壊音が響き、土埃が舞い視界を遮る。

その衝撃で尻餅をついたオレが、土埃の晴れたあとに見たのは・・・・・。

深さ３０？くらいのクレーターが出来ていた。

おいおい、たかが剣撃でこんなクレーターができるのかよ！？

ダメだ、さっきまでのとは格が違う！

こんな正真正銘のバケモノに、ただの人間が勝てる訳ない！！

逃げよう！

急いでここを出よう！

さっき抜いた重い剣を捨てて逃げる。

逃げて向かう先は、ここに入ってきた時の入口だ。

外にはあの骸骨兵がうようよいたけど、バケモノを相手にするより

はまだ生き残れる可能性はある！

オレは脇目も振らず全力で走り、勢いのせいで壁にぶつかり跳ね飛ばされた。

・・・・・・ん？　壁？

「・・・・・・え、ちょ、ちょっとまてよ冗談だろ！！」

入口が無くなっていた。

何故にか、分厚い壁が入口を塞いでいたのだ。

「う、嘘だよな！　冗談だろ！？」

必死に壁に体当たりをするも、びくともしない。

壁は、絶望的な程に厚かったのだ。

ずしりずしりと、あの四つ腕のバケモノがゆっくりと近付いてくる。

その音は、オレには死の足音に聞こえた・・・。

▼使い魔エミヤ▲

少年、最東海斗の心は折れかけていた。

それは、彼をよく知りもしない私の目から見ても明らかだった。

・・・・・・・いや、違うな。

おそらくそれは、私だから見抜けたことなのだろう。

今まで、何十、何百人もの人々の”そういう”顔を見てきた私だからこそ。

人は、圧倒的な実力差を見せ付けられた時、主に二パターンの行動をとる。

一つは、全てを受け入れ、何もかもを諦めること。

もう一つは、全てを受け入れずに、足掻くことだ。

戦争では、前者は無慈悲に殺され、後者は苦しみながら息絶える。

過程は違うにしろ、どちらにしても最後は死ぬ。

強者は生き残り、弱者は淘汰され蹂躙される。

そういう世界で私は強者を殺し、少数の弱者を殺し、大多数の弱者を生かし続けてきた。

『正義の味方』などというくだらない理想を目指し、そして死んだ。

死んでからも、私は人間を殺し続けた。

諦め悟った顔も、自暴自棄の顔もイヤという程に見てきた。

最東海斗は絶望し、諦めている。

故に、もうダメだ。

・・・・・・最東海斗は、ここで死ぬ。

四本腕の骸骨が、先程地面を抉った一撃を放つ為に再び四本の腕を同時に振り上げる。

最東海斗との距離は、1?も離れていない。

ならば、この一撃が外れることはない。

彼の目は、静かに自分を殺す凶器を見詰めていた。

そして振り下ろされる凶刃。

地面が抉られ、大量の土埃が舞う。

その土埃が舞う場所に、最東海斗の姿は跡形もなくなっていた・・・・・・。

「・・・・・・ッ、危ねぇ！　死ぬかと思った！！」

「！？」

その声に私は耳を疑った。

急いで声のした方向を向く。

・・・・・・・そこにいたのは、殺されたばかりのはずの最東海斗だった。

彼のいたのは四本腕の丁度後ろ。

そこの地面にはいつくばっていた。

全身土埃に塗れていたが、何処にも目立つ外傷は無かった。

・・・・・・成る程、驚いたな。

最東海斗は、あの一撃が放たれる瞬間走り、四本腕の足の間をくぐり抜けたのか！

四本腕の剣を見ていたのは攻撃のタイミングを計る為か！

だが、驚くべきなのはそこではない。

真に驚くべきなのは、あの”全てを諦めた”状態からたった数秒で、生きる意思を持ち直した部分だ。

あの表情を見せた者の中でも、あの状況の中で持ち直した者は少ない。

私が今まであったのは精々片手の指で数えられる程もいないだろう。

それも、歴戦の兵（ツワモノ）や希代の魔術師ばかりだ。

そのような事を、この少年は・・・・・・最東海斗は、やってのけた。

口数がやたらと多く、やかましく、底抜けに明るい間抜けなこの少年のどこにこれ程の力が、強い意思が眠っていたのだ？

「・・・・・・死ねるかよ」

最東海斗が言葉を発する。

「オレは絶対に死ねないんだよ」

その言葉は、四本腕に向かっていっている様であり・・・

「ソラとの約束があるんだ！　絶対に死ねねぇんだよ！！！！」

そして、自分にも言い聞かせているかの様だった。

「うぉぉおおお！！」

そして、叫ぶやいなや近くに刺さってあった剣を引き抜き疾走する。

その勢いを殺さず生かし、剣で切りつける！

いや、この場合は”切りつける”というより”殴りつける”と言った方が正しいかもしれない。

それ程までに、乱暴で無茶苦茶な一撃だ。

しかし、その一撃は確かに効いた。

ボキリと呆気ない音を立てて、一撃を喰らった左足の骨が折れる。

足が折れたなら、後は体制を崩し倒れた敵の頭を跳ね飛ばせば勝負

は決する。

だから、この戦いはあっさりと最東海斗が勝ってしまうはずだった・・・。

だが、私は忘れていた。

ここは、そんな”当たり前”の通じない場所だということを。

「・・・・・・え？」

四本腕は崩れなかった。

それどころか、折れて崩れてしまったはずの脚に重心を置き、最東海斗を腕の一本を使って薙ぎ払う。

「が、はッ・・・・・・・・・！！？」

最東海斗が吹き飛ぶ。

低空を飛び、地面の上をガツガツと跳ね、進行方向の剣をへし折りながら行き、やがて受け身もとれずに頭を壁に打ち付け停止した。

頭から血を流し、身体中土埃の黒と打撲傷の青と擦過傷の赤で汚れ、彼は意識を朦朧とさせていた。

「・・・・・・ぁ、ぅ」

最東海斗は掠れた声で呻く。

最早、彼には抵抗する力は残ってはいない様だった・・・。

彼に致命傷を負わせた四本腕は、何故脚を失っても無事だったのか？

・・・・・・それは、四本腕を一目見るとすぐにわかった。

折れて崩れてしまった部分が、土塊と剣の破片の鉄屑で補われていたのだ。

・・・・・・おそらく、あの四本腕は高位霊が憑依したもので、器の破損部位を周りの素材で即座に修復出来る機能があるのだろう。

あれを倒すには、『直死の魔眼』の様なバケモノクラスの神秘か、宝具レベルの概念武装で、奴の魂ごと消し去る。もしくは徳の高い僧でも呼ぶしかない。

そして、四本腕は緩慢な動きで最東海斗に向かう。

・・・・・・・・・・トドメを刺す為に。

「・・・・・・・・・・くっ！」

どうする。

”あれ”を使うか？

”あれ”さえ使えば、四本腕は倒せる。

だが、発動までのタイムラグで最東海斗は殺される。

・・・・・・・ならば、

「・・・・・・貴様、さっさと起きろ！！　まだ死ねないんじゃなかったのか！！！！！」

離れた場所の彼に、そう声をかけることしか出来ない。

結局、私は救うことが出来ないのか・・・・・・

「・・・・・・そうだよな。死ねないよな」

その時、声が聞こえた。

その声と共に、最東海斗は立ち上がった。

頭から血を流し、満身創痍でもまるでなんとでもないかの様に立ち上がる。

「・・・・・・生憎、オレはしぶとさだけはゴキブリ並でね。ソラや静間さんとかから呆れられてるんだよ！んな風に期待されて、道化師（ディアン）気質のオレが期待を裏切れるわけねぇだろ！！　だ・か・ら、絶対に死んでたまるかよ！！？！」

・・・・・・四本腕相手に切る啖呵のセンスもナナメ上をいっているのが実に”らしい”。

最東海斗には、傷だらけの身体でも勝率のない相手に立ち向かう覚悟があった。

その馬鹿さ加減、愚直さはある意味”英雄”に通ずるものがあった。

「・・・・・・・って、ありゃ？剣が折れてる？」

彼は手に持ったままだった剣を見てそう言った。

彼の剣は、あの一撃で柄から上が折れてなくなってしまっていた。

最東海斗は静かに近付いて来る四本腕を見据え、折れた剣を捨てた。

そして、再び戦う為に傍の新しい剣を引き抜く。

その瞬間、全てが変わった。

今、彼が引き抜いた剣が元々”ソレ”だったのかもしれない。
もしくは、彼が引き抜いたから”ソレ”に成ったのかもしれない。

いずれにしろ、最東海斗が引き抜いた剣は変化した。
今までの劣化し風化し錆び付いた剣ではない。
その剣の形状を見た瞬間に理解する。
私の固有の能力故に全て理解する。

この時代はいつか。
―――紀元前のデンマークだ。
この場所はどこか。
―――墓所だ。
この四本腕は誰だ。
―――亡霊の王だ。
彼の持つ剣はなんだ。
―――それは、デンマークの英雄フロームンド・グリプスソンが墓所の中で亡霊の王と戦い手に入れた剣。

その名は、

『幽幻断ち切る霊王の剣（ミスティルテイン）』

▼最東海斗▲

「・・・・・・・・・なんだ？」

剣を引き抜いた瞬間、感覚が変わった。

どう変わったかなんて具体的には説明しずらいけど、とにかく変わったんだ。

その感覚に違和感を覚え、その剣に視線を向けて・・・・・・

「・・・・・・・あれ？？」

なんか形が変わってた。

剣の柄は、よく手に馴染むように微妙に曲がっている。鍔にあたる部分も含め、剣全体が鉛色で装飾なんてものは無く、本当に戦う為の『武器』であることを意識させる構造。その中で一番目を引くのは、やはり刃だ。鋼の色をした刃は、刃全体を白い霞の様なモノに

覆われていて常にぼやけて見え、刃の様子や刃渡りが不明瞭だ。
さっきまで持ってたオンボロ剣と同じ様な物だったはずなのに・・・？

「・・・・・・・・なんだこれは？」

一体全体、これはなんだ？

「『幽幻断ち切る霊王の剣（ミスティルティン）』」

「・・・・・・え？」

エミヤン、何言ってんの？

「ソレの名前だ！　いいからソレを使え！！」

「言われなくとも！！」

何故にか、この剣を手にしてから、謎の自信が煌々と湧き出てくる。

この剣があればイケる。

あのバケモノを倒せる。

・・・・・・オレは、勝てる。

そう心が叫び喚き続けているんだ！

「はあぁぁァぁああアアアア！！！！」

オレは掛け声と共に跳躍し、剣を―――『幽幻断ち切る霊王の剣』（ミスティルテイン）を振り上げる！

それと同時に四ツ腕も自身の剣を振り上げ迫る！

そして互いが同時に剣を振り下ろす！！

四ツ腕の四本の腕から放たれる剣撃のうち、一本がオレの右肩を掠め、一本が左の二の腕を少し削り、残りの二本が防御の為にオレの前に組まれる。

しかし、オレは気にも止めずに斬撃を放つ！

オレの斬撃は、四ツ腕の右胸の少し下から左脇腹までを袈裟斬りにした！

・・・・・・・・・・・・・・・無論、防御に組まれた二本もろとも斬り裂いて。

そして、四ツ腕のバケモノは呆気なく崩れて無くなった・・・・・・。

▼最東海斗▲

「・・・・・・・・・・・・・ッ、ダッは～ぁ！　し、死ぬかと思った！！」

四ツ腕を倒した途端に、腰が抜けて地面に座り込む。

身体中痛くて痛くてたまんないし、対戦中は怖くて恐くて堪らなかった！

今更ながら、奮えが止まんないよ。

あんなバケモノ、倒せるはずがないし！　今生きてるのが奇跡だよね！？

・・・・・・しかし、それにしても、

「何故に、この剣であんなあっさり倒せたんだ？」

さっき見たいに再生せずにさ？

「・・・・・・それは、『幽幻断ち切る霊王の剣』の能力だ」

オレの答えを求めてない独白に明確な回答をくれたのは、やはりエミヤンだった。

「その剣の刃はこの世と霊界の境目に存在している。だから、目には見えない霊体すらも斬り伏せることが出来るのだ」

ーーーまぁ、それ以外にも魔力や魔術を斬ったり、真名を呼ぶことで持ち主の元へ帰ってくる等の能力もあるがなーーー

「ふ～ん？　じゃあ、要するにあの時オレが斬ったのは骸骨見たいな身体じゃなくて中身だったってことか」

「あぁ、そういうことだ。」

成る程、魂ぶった切られたらそりゃ滅ぶかな？

「・・・・・・・・・・・・・・・それより、大丈夫なのか？」

「何が？」

「君の身体のことに決まっているだろう？」

あ、そういえばオレ怪我してるんだっけ？

「いや、全然大丈夫！」

うん、アドレナリンやらエンドルフィンやらがガンガン効いてるみたいで不思議な程痛くない。

しいて言うなら、目茶苦茶ダルいことかな？

「手で後頭部を触ってみろ」

「ん？」

べちょ

ん？　『べちょ』？

「うわ、血凄っ！？　なにこれ血糊？」

「まごうことなき君の血だよ」

「・・・・・・・・・・うん。内心とっくに理解してた」

ただ、普段このＬＥＶＥＬの出血見たことないから動揺しただけ。

・・・・・・いや、このＬＥＶＥＬの出血しても痛くないとか、本格的に大丈夫なのか？

まぁ、どれだけ痛かろうが手当ても何も出来ないんだけどさ。

♪～♪♪

するとここでポケットのケータイから着信音。

取り出して名前を見る。

ー尾崎亜子ー

「はい、もしもし」

『はい、もしもし？元気？』

「お蔭様で大絶賛負傷中ですが、それを除けは元気ですよ」

『へ～、それはよかったね♪』

「・・・・・・ところで一つ質問してオッケーですか？」

『どぞどぞ』

「何故に電話通じるんですか！！？！」

この際、『何故にオレのアドレス知ってるんだ』とか『いつのまにオレの電話帳に登録されたんだ』とかは聞かない。

・・・・・・ただ、何故に次元を超えて通話出来るかを教えやがれ！！

オレのケータイ現在進行形で圏外表示なんだけど！？

『あ～、それは魔法的なアレで』

「魔法ってなんでもアリか！？」

「・・・・・・あぁ、なんでもアリなのが魔法だ」

エミヤン？

何故に遠くを見つめてるんだ？

「じゃああれか？　別にオレのケータイから天野やら静間さんやらに電話出来るっていうk・・・・・・」

『あ、それはムリ。私と貴方の間だけしか出来ないし、私から掛けなきゃ繋がんない』

「・・・・・・・や、役にたたねぇ！！」

・・・・・・・一瞬、ケータイを床に叩きつけようかと思った。

『あ、そうだ。用件言うの忘れてた』

「用件？」

『手帳見てみなさい？』

「ん、手帳？」

・・・・・・・手帳？　手帳、手帳手帳、手帳手帳手帳？

・・・・・・・・・・・・・・・あ、あれか！

あの全自動小説執筆マシーン！

ようやく思い出し、取り出して中身を見てみる。

・・・・・・・ん、さっきまでのバトルもしっかり記録されていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？

なんだこれ？

「文章の最後に”ｆｉｎ”って書いてあるけど？」

ｆｉｎ？
魚のひれ？
んなわけないか。

『それは、１エピソードのピリオドみたいなものよ』

「は？」

『ザックリいうと、ソレが手帳に書かさったら、取材終了。もうその世界にとどまらなくてもいいってこと』

成る程。

便利な基準点だな。

『そういうことだから、次の世界もこの調子でよろしく♪』

「あ、ちょｔ・・・」

ブツッ、ッ～、ッ～・・・

電話切りやがった。

全く、何が『次の世界もこの調子でよろしく♪』だよ。毎回こんなんだったら確実に死ぬじゃん！！

「・・・・・・・・・で、どうする？」

「いや、どうするっていわれてもさ・・・・・・・・・・・・？」

出入り口ももう無いし、やることだってサッパリ無いし、ただ休んでたって怪我が治るなんてことはないし・・・・・・・。

「う～ん、・・・・・・・次行く？」

「了解した」

その台詞と共に、エミヤンを中心に蒼い複雑な幾何学模様を内包した円が広がる。

ちょっと前に経験したばかりの時間移動する為の魔法の展開だ。

オレは、魔法陣が展開し終わる前に放り出していたバックを回収し、再度魔法陣の中に入る。

もちろん右手に『幽幻断ち切る霊王の剣』をもったままで。

・・・・・・・・・・・・・だってさ、これくらい持ってかないと死に掛けた割りに合わないって！！

それに、この剣は多分、というか絶対この先の生命線になると思うんだよ。

そうこうしてるうちに、どんどん蒼い光が強くなっていく・・・・・・。

その光を見ているうちに、ふと頭をよぎるモノがあった。

それは、少し前に体験したばかりのひっど～い車酔いに似たアノ感覚。

・・・・・・・・・・・・・そう、あれリターンズ！？

「ちょ、ちょっとまてエミヤン！！　ま、まだ心の準備ｇ・・・・ッ！！！！」

・・・・・・・・・・・・・こうしてオレはまた別な時代の別な国へ直行することとなった。

次は安全なとこだいいな～と、思いながら・・・・・。

【ＴＯ　ＢＥ　ＣＯＮＴＩＮＵＥＤ】↓Ｎｅｘｔ　ｔｈｅ　ｗｏｒｌｄ”Ｄａｒｋ　ｂｌｕｅ”↓

Ａｃｔ．３　何気に死に掛ける。（後書き）

おはよう。こんにちは。こんばんわ。烏妣　揺です。
Ｆａｔｅ初挑戦！！
うまく書けたか不安ですが、次回からもがんばります！

ちなみに次の世界は、「Ｄａｒｋ　ｂｌｕｅ」＝「紺」ということで、紺色がイメージカラーのサーヴァントのとこに行きます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6392y/

Fate/CHRONICLE

2011年11月20日09時20分発行